

日展ニュース

No. 174

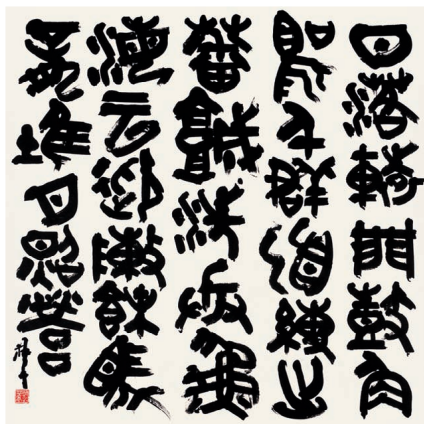
<http://www.nitten.or.jp/>

令和2年1月30日発行

編集兼発行人 土屋 禮一



特集 改組新第6回日展





改組 新 第6回日展 右から宮田文化庁長官、奥田理事長、逢坂国立新美術館長によるテープカット

改組 新 第六回日展を迎えて

公益社団法人 日展

理事長 奥 田 小由女

令和元年 改組 新 第六回日展を明るく元気に開催致します。

新しい令和の時代に生まれ変わった「新生日展」の気持ちで、更に若々しい夢のある日展として発展し繋ぎ続けるよう努力し、我が国の文化芸術の振興発展に寄与して参ります。

また、今日まで日展を応援し支えて下さった多くの皆様と、日展が苦難の折も耐えて精一杯の作品を制作し出品し続けて下さった日展作家の皆様にご心から感謝と御礼を申し上げます。

来年の二〇二〇年は、オリンピック、パラリンピックの年であり日展作家も日本博に参加致し、多くの外国の方々に日本の文化芸術を御紹介する事となります。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書と五科揃った日本一大きい芸術家の集団を力強く世界に発信して参ります。

今後とも皆様の応援、御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

(令和元年十一月)

二〇一九年
改組新 第六回

日展受賞者一覧

大臣賞

追憶	山下保子
清新	斎藤秀夫
瀬	勝野眞言
文部科学大臣賞	井隼慶人
文部科学大臣賞	牛窪梧十

東京都知事賞

海想	中村徹
港の朝・曇る日	長谷川 侑
あおあらし	齋藤 尤鶴
東京都知事賞	大樋 年雄
東京都知事賞	吉川 美恵子

日展会員賞

おいで	諸星 美喜
栗国島の民家	平野 行雄
ささやかな一日の終わりに	中原 篤徳
風と光と水と	村田 好謙
ほのやみ	田中 徹夫

特選

第一科《日本画》

共に歩む。	鶴飼 義丈
ふるさと	大矢 高弓
時を刻む蘇鉄	北川 由希恵
春を待つ	工藤 彩
刻 い 鳩	城野 奈英子
白 い 鳩	竹内 恵利子
海の記憶	土岐 佳子
群に咲く像	野原 都久馬
水に咲く像	平野 美加
内緒の手紙	三谷 佳典

第二科《洋画》

沈黙の地	阿部 良弘
陽のあたる階段	飯塚 康弘
廃 船	茅野 吉孝
フロズン・タイム	驚 悦太郎
歩	佐渡 一清
北の踏切	高田 啓介
天気雨のロンド	遠山 厚史
再生・Peace Bird	中土居 正記
真夜中の魔法	松本 貴子
自 画 像	柳澤 利光

第三科《彫刻》

野風に戦ぐ	伊藤 奏太
立ち行く人	大藤 清壽
旨菜豊人	神山 美登里
無辜の軀	坂本 健光
踊るサテュロスの夢	高砂 晴光

リズム	寺澤 孝明
ひとひら	長谷川 倫子
報恩感謝	山本 将之
対の月	横山 丈樹
道しるべ春をさがしに	脇園 奈津江

第四科《工芸美術》

夜明け讃歌 R-1	石田 満美
Waterfall	加藤 丈尋
遙かなる旅	佐々木 眞澄
白露—玄鳥去る—	武田 司
Find U Again	立松 功至
瞬 光	鶴見 晋史
玄生「観」	西本 直文
景—何处へ—	福富 信
耀 宙	舟越 一生
流 象	森 克徳

第五科《書》

山中 坐	大田 鵬雨
霧	佐井 麗雪
嵯峨山荘色紙和歌集二	下伊豆 博子
四 季	中室 舟水
蛇 化 爲 龍	奈良 衡齋
墨 魂	西村 大輔
安 静	萩野 展輔
名 籍 詩	深瀬 裕之
張 籍 詩	宮負 丁香
王 漁 洋 詩	山口 啓山

座談会

「令和に望む」

出席者

理事長 奥田 小由女

第一科 日本画 審査主任 福田 千恵

第二科 洋画 審査主任 中山 忠彦

第三科 彫刻 審査主任 山本 眞輔

第四科 工芸美術 審査主任 武腰 敏昭

第五科 書 審査主任 黒田 賢一

司会 中村 伸夫
(日展ニュース委員)

令和元年11月15日(金)
於 国立新美術館 地下一階

審査室D



司会 本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。司会を担当いたします五科の中村でございます。よろしく願っています。

今回のテーマは、「令和に望む」ということで、新しい時代に、自律的に、積極的に、どういうふう希望を持って日展をよくしていくか、というテーマで座談会を進めたいと思います。

はじめに、今回の改組新第六回日展の鑑査・審査の状況、作品の傾向、あるいは今後に期待できる事柄等、一科から順番にお話を頂く予定ですが、全体を通して、奥田理事長から、今回の日展の現況に関するご感想、または将来への展望のお話を頂きたいと思っております。

今回展の審査全般について

理事長 今回の日展は、新しい時代、令和の時代初めての日展でございますので、新生日展のような形で第六回展は開きたいということ、最初から意識しております。

ですから、オープニングパーティーの時も、受賞者の皆さんを一堂に、お披露目をして、若い人がどんどん活躍できる日展になるよ

奥田 小由女



うにという意気込みで、準備を重ねて参りました。新しい時代を迎えた日展というイメージで、その点を一番心に置いて始まった日展でございます。

いい作品だったら必ず推奨できるのだという確信を持ってました、どの科の審査員の方もそんなふうにおっしゃっていました。

ですから、とても充実した日展を開会することができたように思っております。

司会 第一科の福田千恵先生から、それぞれの科の今回の審査や作品の傾向、あるいは今後に向けての期待等がございましたら、お願いいたします。

福田 今年は、その一番大事な制作の時期に台風がございました。これは一つの例なのですけれども、昼はボランティアと後片付け

をし、夜は制作に励んでいましたという話を聞いております。

審査に関しては、今回、外部審査員を抜きますと、八〇代が一名、七〇代が二名、六〇代が五名、五〇代が四名、四〇代が四名という感じで、年代層もかなり広範囲になって審査いたしました。

それぞれの年代から来る作品の見方もありますし、美意識というものは個人のものだと思うのですけれども、そういうのもかみ合って、大変いい審査ができたのではないかと思います。



開会後の文化庁長官

それともう一つ、今年は五名の女性の審査員が出ていました。ここ数年、増える傾向にあります。

これは無理やり女性だから選んだというのではなく、ここ数年、いい仕事をしているということで、女性たちも、今、審査をする立場に入ってきたということを、自分も女性なので、うれしく感じています。

司会 第二科の中山忠彦先生、お願いいたします。

中山 私は、この審査をやる前になるのですが、その時に申し上げたのは、審査主任というのは票を数える役目ではない。審査主任の美意識というか、日展に対する考え方の基本的なことから審査をする。それによって票数どおりの結果が出ない場合があるということとをあらかじめ納得して頂いた上で、審査を始めました。審査員の皆さん方が非常に協力をしてくださいまして、私の経験では、今までにない審査ができたと確信しております。

これは陳列や何かの場にも及んでおりまして、今年の陳列の状態というの、非常に見やすいという評判を頂いて、私も大変よかったですと思っています。

司会 第三科の山本先生、お願

いたします。

山本 今年の大きな変化としては、彫刻は審査日程が二日になりました。日程についてはちょっとタイトかなという、そういう感じでした。

審査の前に皆さんに申し上げたのは、審査あるいは方針といったようなものですが、審査員が、外部審査員、それから中に審査主任、会員の審査員、新審査員といまして、おのおのの感覚の違い、経験の違い、いろいろあるけれども、自分が置かれた立場をみんな意識しよう、これが一つ。

もう一つは、今年は令和の第一回目という考え方で、今日からがスタートだ。今の時代を生きている、今の空気を吸っている人たちがどんな仕事をしているかということをよく見よう、そういうこと



山本 眞輔

を大まかな方針として、審査をいたしました。

非常に新鮮な作品がありました。福島等の罹災者の作品も入選あるいは特選に選ばれております。いまだに家の泥をかき出しながら生活しているのだというようなことを、この間報告を受けましたが、そんなふうで、非常に多岐に渡っているというふうに思っております。

それから、次回展に向けてですが、去年の審査員達がどうやったかというのはデータが残っているのですが、余り参考にならないのです。新しく自分たちで、今年はいかにこうということ、皆さんで意見を出し合って進めてまいりました。だから、逆に言えば、次の年はこういう審査をしてほしいというような伝達は、今年から私は要らないと思っています。その時の審査員の役割で十分だと思います。

あと、内容ですが、言葉で言いますと、「さわやかな風が会場に吹いているね」というふうに言うてくださった人がいます。これまでの日展の中にはないような作品が幾つも見られました。今までの展覧会にはなかった表現が出てきております。



司会 第四科の武腰先生、お願いいたします。

武腰 工芸というのは、ご存じのとおり、ものすごく生活と密着したもののですので、いわば生活空間の中でその姿が徐々に変わってくるのが工芸だと思えます。そういう中で、作品を何十点か並べるのですけれども、まず最高にいい技術を見てもらおう。近寄って技術を見てもらい、離れてその感性を見てもらう。その二つがないと、やっぱりいい作品ではないと僕は思っているので、常にそれを主張してきました。

特に特選は、いろいろ種別がご

ざいます中から、各部門に分かれて、陶器なら陶器、漆なら漆といろいろな種別の最も良い作品を審査員が選んで頂いて、それを皆さんでまた決めて頂くという方法をとってまいりました。

今はいい作品が出てくれば誰でも賛同してくれるという、そういう時代になってきたのは、大変いいことだと思えます。常に言うのですけれども、次の年代に向かって、自分が生きている証みたいなのを絶対に作品に生かしてください。昔の江戸時代の文化みたいなものを引きずってはいけません、どちらかというと、昔のものにひげをつけたようなものは余りおもしろくないということ、ぜひ今生きている証を後世へ残していってほしい。そうでないと、昭和、平成、令和という時代が見えてこない。そういうことを常に僕は申し上げてきました。

一九号の台風の関係で、やや搬入数が減りましたけれども、作品の内容は大変充実していると思います。いい審査員に囲まれて、いい審査ができたと思っております。

司会 第五科の黒田先生、お願いします。

黒田 書の場合は、審査日数が、

本当に長丁場で、その九日間のうち、今回は特に台風がありまして、丸一日、空白的になってしまおうという、審査員にとりましては、非常に焦るようなこともあったのですけれども、その中で、基本的には絶対によい作品を見逃すまいということ、審査に臨んで頂きました。

今年は、一三九点という出品増があつて、全部で八六八二点となりました。書にとつては、それだけ日展を目指すという人が全国に多くいるのだということ、本当にありがたいなと思っております。

その中で、壁面というのは限られていますので、陳列する点数がこれ以上増やせん。何とか増えた分、陳列ケースを少し増やして、二五点の入選増を図ったのですが、いずれにしても一二％強という厳しい入選率となりました。それだけその中で入選できるということは、日展を目指す者にとつては、入選というのはステータスがあるのではないかなと思っております。

作品的には、すごく洗練されたものが多くありますし、大体そういう作品は誰が見てもいいというふうに思うのですけれども、その



中で、ちょっと未完成であつても、「何かこれは」と光るものがある少し出てきてもよかったのではないかな、そういう希望的な思いもあります。

壁面については、大体書の場合、いつも特選の部屋、役員の部屋というところに人が集まってしまうので、ほかはある程度人の流れに沿って早く流れてしまうというのが多かったのですが、今年状況を見てみると、どの部屋にも人がゆったりと歩いて、ゆっくり鑑賞して頂いているような雰囲気がありましたので、展示の面でもすぐくバラエティー豊かにできたのではないかな、そういうふうに思っております。

司会 一通り一科から五科までの主任の先生方にお話を伺いましたが、厳格な審査、そして新人の

発掘、あるいは壁面の配置の工夫など、さまざまな点でそれぞれの科のご苦労話も含めてお伺いしました。

ここからは、自由なフリートールという形で、進めたいと思います。今拳がった事柄についてもっと強調されたいこと、あるいは、今後に向けてお話しされたいことがございましたら、お願いしたいと思っています。

理事長 私も、審査員という形ではなく、監査の形で各科をずっと見せて頂きましたが、皆さんが一丸となって、いい審査をしよう



日本画会場

という意気込みが伝わってくるような、そういう雰囲気各科にございました。

司会 例えば日本画ですと、すごく若い方が特選で、かつての日展にはないような新人の抜擢みたいなことが少しずつ定着してきた感じがしておりますが、福田先生、どうですか。

福田 日展の日本画は、とてもバラエティーに富んでいます。具象から、超リアルティーから、それこそ今の現代アートのような仕事まで、全ていいものであれば認めようじゃないかという解釈を持っています。いいものであれば、年齢に関係なく皆さん応援しているわけです。

中山 洋画の場合の第一室の考え方といいますのは、もう十何年前、私が発案して、審査員と特選受賞者を向かい合わせで展示するというふうな形をとって現在まで続いています。これは数は少ないのですが、特選の作品よりも審査員のほうが劣るじゃないかという客観的な声が出るものがあったり、どっちが審査員かという率直な質問があったりする場合があるのです。これは非常にいい勉強になっているというふうなことを、その向かい側の審査員の皆さん方

はおっしゃる。

山本 陳列方法も考えなければいけないと思いますけれども、ちょっと視点が変わるのですが、私たちも名前を見ないで審査してしましたので、特選二五歳というのがありまして、おつ、すごいなと後で気づいて。これなら皆さんに、若い人たちが頑張っていますということをアピールできるなというふうなことは思っております。

武腰 四科では、特に壁面の場合ですと、近くではなかなかその人の感性は見にくいのです。技術は見えても。だから、中央にディスプレイがありますから、僕はいつも近くで見ずに反対側から見ているのです。要するに、離れて見えます。ああ、この人、感性があるなとか、近寄って見て、いや、仕事もきれいだな。これは本物だと思って、いつも見ているのですよ。

ちよつと気になることがあります。私は日展の入場者数のカウントの仕方について問題があるのではないかと思います。つまり一科から五科まで、各科それぞれの入場者の数が具体的に結果として残るようなカウントの仕方を考えていた方がいいということです。

司会 そうですね。それも重要

なことですね。

黒田先生、書の場合は、漢字、かな、調和体、篆刻と、さまざまな領域があつて、先程は審査のご苦労をお話しされましたが。

黒田 そうですね。本当に入落の線上の作品をふるいにかけるというのは……。

限られた点数で、これ以上入選を増やすことができないというところまでいつていますので、本当はもう五、六点取ってあげたいけれども、その五、六点を落とさないと会場に入らないというような状態になりますから……。



オープニング・パーティー

講演会後の千玄室先生



書の場合、一番問題なのは、額は全部が見えますけれども、帖、巻物は、ケースがあつて、ケースの長さが一・八メートルですから、そこに三点入れないことには展示ができないということになります。本来ならば四メートル以内の巻物、あるいは帖で出さないということになっていきますから、出品して、たとえ入選したとしても、五分の一、六分の一しか広げてもらえない、というふうになるので、巻物の半分ぐらいは見せてあげたいというのが我々の望みです。

現状では五〇センチしか広げあげられないというのが、本当に

つらいところかなと思います。何とかそういう問題が解決できることを望んで久しいのですが、なかなか難しいですね。

山本 彫刻ではバリエーションをつけるために、二つのグループに分けて、今年は一四〇センチまで、今年はフリーというようにすることでやっています。でも、陳列すると、今年は小さいとか、余りそういう感じはしないでしょう。だから、本当はそんな制限はないほうがいいとは思いますが、今、彫刻はそうやっています。

司会 これまでには出てこなかった問題の一つに、会期のことがあります。かつて日展の会期は六週間ありましたが、今は四週間になっていますよね。この会期を三分の二にしたことで、先生方の科で何か問題があるようでしたら、おっしゃって頂きたいと思います。

中山 私の経験では、余り会期が長いと、そのうちにそのうちにとまっているうちに、逆に見逃してしまうことがよくあります。博物館などで、今も特別展をやっています。いつまでだなど、頭の中に一応入れるのですが……。いついつまでに行かなければならない、ということになりますと、無理しても行きますので、日展の場

合も、私は、結果を見なければわかりませんが、一、二週間少なくなっても、余り変わらないのではないかと、私の意識ではそうですね。

(休憩)

司会 後半のテーマは、これからの日展、特に令和という新しい時代に対応する新たな日展ということでお話をお願いしたいと思います。

新しい時代に向けての
日展について

理事長 今、第六回展で、日展も改革に入ってからかなり落ち着いてきて、順調に推移していると思うのですが、世の中もだんだん高齢化してきますし、日展自体も年齢も高くなってきましたので、これから若い方に本当に活躍して頂かなければいけないわけで、次世代に、令和の時代に、平成から令和につなげたということの思いが非常に大きいわけなので、それと、それと同時に、若い方に令和の時代を受けとめてもらっていくということの重要性を今感じているわけです。

洋画会場



日展は非常に大きな団体ですけども、やはり人を育てていく、作家を育てていくという、各科でそれをこれから大事にしていきたいなと思います。才能のある人をどんどん日の当たるように育てていって、健全な日展であり続けたいと思っています。

福田 十一月二日に日本画のシンポジウムがありまして、地方では日本画の人たちは減っていないですね。むしろ東京で日本画を描く人が少なくなっています。金沢では家賃などの補助金を出してくれて、若い芸術家を育てている。京都でも、もちろん中心のと

彫刻会場



ころではないと思いますが、古い町家をシェアハウスとして、若い人たちにフロアを貸してあげている。東京もしてほしいのだけれども、というところの話で終わったのですね。

若い人たちはそういうのに敏感ですからね。

司会 それでは、中山先生、お願いいたします。

中山 今のお話で、私も思い出しましたが、これは地方も含めて東京の近辺でも廃屋が非常に多くなっている、あるいは廃村のような形になっている。そういうテレビの映像を見ながら、こういうと

ころを作家が利用できないかなという思いはしていたのですね。

これはちよつと昔の話になりますけれども、フランスのルイ一四世が、外国の作家、国内の作家に限らず、経済的な応援をして、自由に作品をつくらせるという組織をつくりました。それでフランスの文化はあれほど立派なものになっていったのですね。それは国家的あるいは王権力の問題ですから、日本とは全く違う世界ですが、やはり上に立つ人の考え方によって随分文化も変わってくると思います。

若い人たちへの日展としての支えが何かできるのかどうか、これは難しいことだとは思っています。

ところが、日展には、ご存じのように、洋画はたった一〇〇号しか出品ができないという制限があ



中山 忠彦

る。もしそれを日展として、全部じゃないですけども、優秀な人には二〇〇号でも三〇〇号でも壁面を提供しようというお考えがあればと思います。

寸法制限の問題。これは洋画だけの問題ではなくて、日本画、洋画、各科全体の問題も含めて、もう一回考え直していくべきではないか。

司会 これも大きな課題だと思います。

山本先生、お願いいたします。

山本 今の中山先生の問題、やつぱり日展全体のこれからの理事会の問題ですね。単に審査に当たった者としての意見ということで、ここだけで終わらせないで、理事会までもう一回持ち上がって頂かないといかんですね。先生がおっしゃったこと、ものすごく大きな問題だと思っています。

私、彫刻なのでですけども、ポイントを三つ言います。

まず、彫刻は出品点数が少なくなり、若い人へのアピールが非常に重要だということです。日展に出品することで仕事が得られるような形を模索しなければならぬと思います。

もう一つは、公益社団法人としての役割をもう一度確認すべきだ

と思います。

それから、一般の人たちへのアピールという点ですけれども、日展の日は一人を超すのですか？ただなら見てやろうというような気持ちがあるにあらわれている。そんなふうを受け取ると、フリーの日を増やせばいいやと簡単に思うのですが、それは乱暴な意見でしょうか。

武腰 前から自分は思うのですけれども、今、少子化が進み、高齢化もあります。だから、中高大の人にいか日展を見てもらうか。どういうふうにしてそれを行つたらいいか、ちよつと自分には



書会場

武腰 敏昭



に感性が素晴らしくて入選するという人もいます。

理事長 ですから、日本画のほうは、二〇代とか、そういう方が特選になられたり、ああ、うらやましいなと思いますよ。工芸の場合ですと、やはり表現する力をマスタするまでにどうしても時間がかかるので、なかなか直接表現というのができない仕事なのですね。

武腰 若い人は生活がありますから、大学を出ても、即、お金になるほうへ行ってしまうのですね。こっちへ向けようとしても、なかなかね。

福田 実際の話、日本画の絵の表現方法が平面で描くものですが、アニメとか映像の世界へ副収入を得るために働きに行ってしまうて、本当は日本画を描きたいのだけれども、結局、そちらの作家になる。

やはり日本画も覚えるのに時間がかかりますからね。昔は胡粉をとくので一〇年と言われたもので、技術的には時間もかかるので、きちんとした技術を持った作家だったら、工芸と一緒に思います。ただ、今、感覚的にいいものは認めてあげようというところがたしかにあります。

さらに日本には伝統的な墨の描き方とか、デッサンの方法とか、ありますので、そういうのを身につける必要があると思います。大学では教えていますが、独学で頑張ってくる人も応援しています。入選はなかなか難しいと思って避けないでチャレンジしてほしいと思っています。

黒田 書も、同じようなことが言えるのですが、専門の大学を出ても、書の教師になる道というのが今の時代極めて少ない。一般の社会に就職すると、せっかくの才能が活かしくいという状況が続いています。

書の場合、あの作家が好きだから、あんな作品の書ける作家になりたいと憧れや興味を持つことからはじまります。小さい時から目で見て楽しんで、ああ、何かやりたいて、そういう興味が湧くことによって、その道に進んでくれる人が増える。

今は小学校の三年生から習字があるのですが、一、二年生から何とかお習字をやってもらおうということで、水書（すいしょ）、水書きですけども、やつと来年度から取り入れられるようになって、それも一つの進歩だな、書にとっではありがたいなと思います。

下村元文部科学大臣来館



そういうところから、少しずつですけども、種を蒔いたものが芽を吹いて実をならせるようなことになったらいいなと思っています。

巡回展の事ですが、日展というのは五科あるので、その一つだけ、絵画とか彫刻、工芸とか書だけとかではなく五科が全部ある展覧会というのを見てほしいし、いろいろなところでやってほしいと思っています。

福田 日本画では、助成金を出してくれるメセナを利用しない手はないのではないかと、という若手

想像が付きませんけれども、最近の子どもたちというのは、どちらかというと、芸術のほうが機械文明に押されているようで、スマホとかタブレットばかり見て、電車に乗っていますと、一〇人中、九人ぐらいは見ていますからね。だから、そういう人たちをいかに文化、いわば日展のほうに目を向けさせるか、大変なことだと思います。高校生や大学生には、無料とはいきませんけれども、日展に来てもらうような工夫をしてもらえば、何とか興味を持って頂けるのではないかと。

工芸ですと、どうしても技術を覚えるのに五年、一〇年ばかりかかります。大学生でたまに入選する人がいるけれども、中には技術的には余り進歩していなくて、変わったものをつくるということで、特

福田 千恵



からのたくさんのお話が出ています。今、美術館自体がメセナを利用して、会社がバックアップしているというのはよく聞く話なのでですね。

中山 この間、ある若い人気作家の作品を画廊に見に行ったのです。そうしたら、会場に入れないくらい若者であふれかえっている。それで画家に、どうしてこんなに集まったのと聞いたたら、今、スマホとか、何かの情報があつて、全然知らない人なのですけれども、それを通じて見に来たと。彼が、自分の作品はこうこうこういうもの、だということを出したの、でしよう。その結果がそういう状態になっているわけです。新しい情報の伝達の手段というものを、もっと日展も考えていいと思います。

それから、巡回展に関しては、私自身の経験から、巡回展で私も恩師と知り合い、今日に至っている経緯がありますから、これはぜひとも拡大してやって頂きたい。予算の問題などがあるとは思いますが。

また、新聞社の協定によって、団体展の批評は日刊紙には書かないという申し合わせをして、随分長いことになるのですが、もうそろそろ、そういうものからは解放してもらいたいと考えてはおります。

それともう一点、日展は偉大な先輩たちをたくさん持っているわけですから、毎年というわけにはいかないでしょうが、例えば日本画の中の三山を初め、日展の先輩方の作品を、小さい部屋でもいいから一室に集めて、我々自身ももう忘れていた作家たちもいるわけですから、勉強のために、その先生方の作品を見せていただけないか。観客の中にも懐かしいと言っていただけでもいいと思います。から、そういう方法で先輩方の力をかりるのも、一つの方法だと考えます。

司会 最後に、奥田先生、きょうの座談会のまとめのご発言をお願いしたいと思います。

理事長 とにかく、私たちは日展に一生をかけているわけですが、今の若い人は団体離れといいますが、そういうのになじまなくなってきたという風潮は確かにあると思うのですね。

ですけど、ある程度日展で頑張ってきたても、もうこれ以上希望が持てないからやめたいとか、そういう方もぼつぼつ出てきています。で、そんなことを考えないで、とにかく頑張りますよということを書いて、引きとめたりする方も幾人かございます。

じゃ、やめられて、自由な世界に戻って、それ以上の作品ができるのかなと見ていると、やっぱり日展で頑張ってきた時のほうが絶対いいということになるのですね。

ですから、日展というのは、皆さんが一年を通して最大に頑張つて、しかも作品を残していった、精いっぱい仕事のしている、歴史がずっと動いているわけですから、一番すごい、最高の場所だ、というのを皆さんがもっと理解して、その喜びを若い人たちに与え続けていければいいと思います。し、日展という団体の良さをもちよつと皆さんにわかってもらえたらいいなと思っています。

若い人に、そういう喜びとか、全てを日展にかけていくエネルギーみたいなものを覚えてもらえたらいいなと思いますし、そういう魅力を教えて、若い人がずっと続けていけるような日展でありたいなと思います。が、どういふふうにしたらそれができるのかといったら、やっぱりみんなが最高の作品をつくることだと思っています。

司会 長時間にわたり、とても有意義なお話をいただきました。それでは、時間になりましたので、これで終わりにさせていただきます。本日は、どうもありがとうございます。



司会 中村 伸夫

(おわり)

外部審査員より

図らずも日展のご指名を受けて

(第一科日本画 外部審査員) 原 田 平 作

予想通り初めに入落選の鑑査があり、続いて特選の選定があったわけであるが、それらは三日間かけて行われた。数が多いからそうなるのであるが、経験上県展や市展などでは一日か二日で終わるところを、ゆつくりと丁寧に鑑査が行われた。これが今度の審査に参加させていただけてまず第一に感じたことである。

思えばこうしたことが、一作一作の技法というか描写力が一定の水準を超えているという日展の一つの特色を、支えているものなのだと思うが、それは文展、帝展、日展という官展から育ってきた伝統というものである。今までは出来上がった展覧会を見て、日展日本画は表現力には問題のない作品の陳列会だとみてきたが、こうして中に入ってみて実感した。これは院展の着想、創画会の調子と比較して学び実感してきたことと、変わりはなかったということになる。

それから次に第二の感想として、作家の集団としてその特性のような点はどのように発揮されてゆくのであろうかと、関心をもって当たってみたが、それは選考の方法を指導者がまず提案し、それを軸に審査員が意見を述べて調整し実行するという方法で行われていたことをあげてみたいと思う。これは憚りながらそうすることによって、作家の集団としての一定の特色が発揮されるのだと思われ、なるほどと思った。

県展や市展などでは公平性と言っているうちに、時には何か合点の行かない場合も表ずるからである。

そのほかいずれにしても良い経験をさせていた。入選した作品、そして特選に選ばれ、受賞した作家の方々に栄光あれと改めて申しあげたい。



原田平作 (はらだ へいさく)

一九三三年東京都生まれ。

京都大学大学院美術史博士課程中退。

京都市美術館学芸課長、大阪大学文学部教授を経て、愛媛

県美術館長・名誉館長。

現在、大阪大学名誉教授、一般財団法人きょうと視覚文化振興財団理事長。

日展洋画―鑑審査体験記

(第二科洋画 外部審査員) 瀧 悌 三

第一審で、一、六七七点を鑑査する。過去数々の鑑査を経験している私だが、日展は初めてで、これほど多くを見るのもまた初めてだ。どうこなすのか、関心を持って、成り行きを見守ったが、確かな慣行、もしくは経験則に拠っていて、なるほど、そのため巧くスムーズに進行しているのか、と得心した事だ。

入否は、挙手による。当方、手上げるか、下げたままで、作品は、入るがあり、外れるがあり、明暗分かれる。結果がどうあれ、当方、どれも確り見た。それも二日掛り、精神の緊迫の二日の持続、大した事のように感じる。

その間、わずかに数点だが、どこの誰のものか判り、通ったのは悦び、不首尾には哀れを覚えても、欠陥ある故仕方ないと、冷たく構えていた。外部の者の気楽さのせいである。だが内部審査員はそうはいくまい。無所属は別として、自分の所属する団体の者の作品は誰のそれか、判るのが幾らもあるう、その入落を目にすれば、胸中波風立つであろう。そう思い巡らし、同情心湧くのであった。

二審になると、数ぐんと減り、緊張ほぐれ、進行流れるようにして、最終の結果に至る。それから、後から見返すと、善し悪しあったのが、どれもこれも善く見える。何やら安堵であった。

だが、特選は、中に腑に落ちないのが混じる。でもそれは個人の感じ方の違いに起因し、いつもある事、異とするに当たらない。大臣賞、都知事賞、会員賞は、当方の意に適うのに決まる。善かった。

終わって思うのは外部審査員の制度。文展初期は外部審査員が多かったが、改革されて内部審査員だけに移行した。その経緯に照らすと、この制度、後退の印象が否めず、無理がある趣だ。いずれ遠くない将来廃されるのではないか。



瀧 悌三 (たき ていさく)

一九三一年東京都生まれ。

東京大学文学部美術史学科卒業。

日本経済新聞社文化部編集委員を経て、現在、美術評論家、美じょん新報主筆。

第三科彫刻の審査を終えて

(第三科彫刻 外部審査員) 守屋 正彦

第三科彫刻は文部省美術展覧会からその伝統を継承してきた。歴史的にはギリシア・ローマの古典彫刻を範とし、具象を中心とした造形表現を継承し発表してきた。時代の潮流を反映した表現、いわゆる現代美術とは異なり、粛々と存在する生命、人体の造形美を求めてきたのである。

日展の彫刻は、その基本的な流れを大事にしながらも、ただ、かたくなに造形の本質を具象に追い求めるだけでなく、今を生きる作家たちが感得する新たな時代気分が反映した表現となっている。現代は社会の様々な事象が変化している。とくにA・I(人工知能)が人間の仕事に進出するなど、先行きが不透明な時代を迎えた感がある。そのような時代気分の中、彫刻家が人間性の回帰を促すように、このたびの第三科彫刻は充実したものであった。

外部審査員として参加した感想を申し上げると、審査会場は静かであった。審査主任が公募による出品をそれぞれ示して、その都度、可否を求める。審査員は無言で赤札を持って挙手をし、入選、特選を選出した。また、文部科学大臣賞、東京都知事賞、日展会員賞は理事、外部審査員の投票であった。いずれの作品も日展彫刻を象徴するにふさわしく、達意の造形表現がみごとであった。

このたびの展覧会では若い作家の入選、特選が目立った。求道者のように具象彫刻を追求し、また新しい感覚、野心ある構想もうかがえ、将来に彫刻第三科を担う後継が次々と誕生している。何とも頼もしい限りである。

彫刻は空間の中に置かれる。会場では作品があらゆる角度から鑑賞できるように、展示の工夫が見られた。人間の姿態、所作、感情を汲み取り造形する、具象彫刻の神髄を日展彫刻に見る。



守屋正彦(もりや まさひこ)

一九五二年山梨県生まれ。

東京教育大学(現・筑波大学)大学院修了、博士(芸術学)。山梨県立美術館学芸課長を経て、筑波大学教授。

現在、山梨県立博物館長、筑波大学名誉教授。

審査を終えて思うこと

(第四科工芸美術 外部審査員) 柳原 正樹

美術という仕事に携わってから、すでに四〇年以上の月日が流れ、その間にいくつもの展覧会の審査員を経験したのだが、そのたびに緊張し、どこか嫌悪感にも似た思いをするのである。それは、出品された作品に優劣を付け、さらに落選という決断に迫られるからにほかない。

日展という日本の美術界をリードし牽引し、かつ歴史ある展覧会の外部審査員を務めることは、まことに光栄なことであるが、責任の重さも感じながらの審査でもあった。

さて、このたびの審査を終えての感想だが、審査会場に入った時、ひしひしと伝わるエネルギーを感じたのである。それは、工芸に対する熱き思いにほかならず、出品作家ひとり一人の美に対する姿勢でもあった。審査する側は、その情熱と対峙したのである。全国から集まった六四八点の出品作は、入選、落選と熾烈な戦いを強いられ、入選数四三三点が戦いを制したのであった。その中からさらに特選の作品十点を選出したのである。特選を受賞した作品は、さすがに見ごたえがあり、かつ技術的にも芸術性にも富んだものであった。工芸という匠の技が基本となる作品は、緻密で完成度の高いものでなくてはならない。さらに、美という要素が加わって初めて工芸美術として成立するものである。

そして、文部科学大臣賞、東京都知事賞、日展会員賞が選出されたのであった。これら受賞作品について思うことなのだが、日展の第四科(工芸美術)としての長い歴史の中で培われてきた作品群は、ややもするとマンネリズムに陥りがちなのだが、今回の受賞作品は、新たな日展の姿を示すかのような予感を内包していた。ともあれ、快い疲れの残る審査であった。



柳原正樹(やなぎはら まさき)

一九五二年富山県生まれ。

大阪芸術大学芸術学部美術学科卒業。

富山県立近代美術館、富山水墨美術館を経て、

現在、独立行政法人国立美術館理事長、京都国立近代美術館長。

日展のさらなる発展のために

(第五科書 外部審査員) 島谷弘幸

毎年の日展は、出品者だけでなく美術を愛好する人にとっては大きな関心事である。今年の第五科も、全国から古典を基盤としながらも創意工夫を凝らした多様な作品八、六八二点が出品された。ここ三年微増しており、日展の改革が浸透している成果であろう。

しかし、周知のように、第五科は極めて狭き門で、限られた展示スペースに許されるのは一、〇六六。入落の境は紙一重で、一審から良い作品を見逃すことの無い様に丁寧審査を進め、気持ちには外部も内部もなく最終選考まで共同して選出することに専念した。審査は、苦渋の選択に終始し、結果として入選は東京の二九点を筆頭に兵庫、京都、埼玉、大阪、愛知と続く。必ずしも人口と比例しないのは、地域の書に対する指導者の熱意や意識の違いと思われる。今後さらなる普及に務め、良い作品を出品してもらいたい。

ところで、書は造形と線が命である。線は個人のセンスがものをいい、短期間で身に付けることは出来ない。一方の造形は名筆を手習い、眼習いすることで、日々に上達が見込まれる。加えて、他分野でも同様であろうが全体の調和が大切なのが書の世界である。ほかにも、筆の流れや遅速など見るべきところが多い。

さて、出品作家は、自らの美

意識のもとに一心不乱に書作に向かうと全体が見えなくなることもある。ここでのアドバイスで、作品は一変することもあり、助言の役割は極めて大きい。いま、日展は審査員が発表されると、当該の人は弟子も他の人の作品は見えてはいけない。これはより良い作品を目指す日展にとってはマイナスであろう。いま、外部を招いての審査に情実はなく、斯界の発展を一同が願っている今日において、何か良い方策を考える必要がある。

島谷弘幸(しまたに ひろゆき)



一九五三年岡山

県生まれ。

東京教育大学

(現・筑波大学)

教育学部芸術学

科書専攻卒業。

東京国立博物館

学芸部美術課書

跡室長、資料課長、展示課長、文化財部長、

学芸研究部長、副館長(兼) 独立行政法人

国立文化財機構本部研究調整役を経て、二

〇一五年四月より九州国立博物館長。



特別講演会
裏千家15代・前家元
千 玄室氏



『わくわくワークショップ』の様子



『らくらく鑑賞会』の様子

改組新第6回日展イベントレポート

※今年もたくさんの方が参加してくださいました。この様子はHPでご覧いただけます。

『講演会・シンポジウム・映像による作品解説等』

『ミニ解説会』

『らくらく鑑賞会』

『グループ解説』(スクールプログラム『わくわくワークショップ』)

十八年目迎えた『わくわくワークショップ』。会期中、日曜日の三日間、午前・午後の全六回で、参加人数は一一七組二九九名。夏の『OneDay Art』と併せて参加する方も多く見られました。

会場での鑑賞と本物の素材体験。各部門の特徴を踏まえたプログラムで、参加者は短時間ながら充実した時間を過ごせたようです。好きな作品を選んで、質問や感想を記入する鑑賞カードは、作家と若い鑑賞者をつなぐ役割を果たしました。今後も「日展だからできる」普及事業を展開してまいります。

〔教材等協力〕

(株)榮豊齋、(株)オリオン、(株)吉祥、(株)玉蘭堂、(株)クサカベ、(株)呉竹、(株)ケーエス、(株)光雲堂、ターナー色彩(株)、(株)ターレンスジャパン、(株)平助筆復古堂、(株)墨運堂、ホルベイン工業(株)、松田油絵具(株)、(株)ミューズ、ヤマト(株)、ヤマトロジステイクス(株)

改組 新 第6回日展 入場者数（国立新美術館）

月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)
10/31	木	晴	3,909	11/9	土	晴	3,572	11/18	月	曇のち晴	4,947
11/1	金	晴	5,829	11/10	日	晴	3,612	11/19	火		休館日
11/2	土	晴	3,495	11/11	月	曇	3,240	11/20	水	晴	5,316
11/3	日・祝	曇	3,815	11/12	火		休館日	11/21	木	晴	5,277
11/4	月・祝	晴	3,316	11/13	水	曇	4,137	11/22	金	雨	4,567
11/5	火		休館日	11/14	木	曇のち晴	4,057	11/23	土・祝	雨	6,715
11/6	水	晴	2,652	11/15	金	晴	10,360	11/24	日	雨のち曇	7,118
11/7	木	晴	2,555	11/16	土	晴	5,447	入場者数103,722名（平均4,715名） ※10/31は出陳者内覧会			
11/8	金	晴	3,411	11/17	日	晴	6,375				

改組 新 第6回日展 応募点数及び陳列点数（新入選数は入選数に含む）

	日 本 画	洋 画	彫 刻	工芸美術	書	合 計
応 募 点 数 (前年度比)	393 (-44)	1,677 (-74)	108 (-11)	648 (-60)	8,682 (+139)	11,508 (-50)
入 選 点 数 (新入選数)	169 (23)	528 (64)	85 (11)	423 (32)	1,066 (195)	2,271 (325)
無鑑査点数	140	125	158	128	145	696
陳 列 点 数	309	653	243	551	1,211	2,967

改組 新 第6回日展 巡回展（予定） 会期は変更することがあります

開催順	開催地	会 期	会 場	開 催 者
	東 京	2019年11月1日～11月24日	国 立 新 美 術 館	公益社団法人 日 展
1	京 都	12月14日～2020年1月11日	京 都 市 美 術 館 別 館 みやこめっせ・日図デザイン博物館	日展京都展実行委員会
2	名古屋	2020年1月29日～2月16日	愛知県美術館ギャラリー	中 日 新 聞 社
3	大 阪	2月22日～3月22日	大 阪 市 立 美 術 館	日展大阪展実行委員会
4	安曇野	4月25日～5月17日	安曇野市豊科近代美術館	安曇野市豊科近代美術館 公益財団法人 安曇野文化財団
5	金 沢	5月23日～6月14日	石 川 県 立 美 術 館	北 國 新 聞 社
6	長 崎	6月21日～7月20日	長 崎 県 美 術 館	日展長崎展実行委員会

大臣賞受賞作品制作意図

東京都知事賞受賞作品制作意図

日展会員賞受賞作品制作意図

内閣総理大臣賞

第一科（日本画）

山下 保子「追憶」



過ぎた頃への回想の絵です。若い頃は情熱的に過ごし、多くを感じ取って日々を過ごしたものです。画面の花々は、その頃の象徴として描き、人物は若い頃の形と、後に追想する人の想いを同時に表現したいと思いました。

東京都知事賞

第一科（日本画）

中村 徹「海想」



海に棲む生き物が好きです。泳ぐ姿に機能美があり見ていて飽きない。きれいな模様の衣装をつけて優雅に舞う姿は、まるで貴婦人のようだ。一人の少女を配して、この魅力的な魚達を描きました。水槽から大海へ解き放すように、画面いっぱい、泳がせてみました。

日展会員賞

第一科（日本画）

諸星 美喜「おいて」



写生を重ねても、まだ足らなくて。ヤマアラシの抜けた鬣が欲しくなった私は、飼育員さんに声をかけた。許されることではないが、それを握った瞬間、盗んで逃げたかった。強くて硬い鬣を広げた時、「追風^{おいて}」を受けて少し前へ進む姿を、心のままに描いた。

内閣総理大臣賞

第二科（洋画）

斎藤 秀夫「清新」



長年に亘って人物像を描いているが、最近若い綺麗な女性の表面的な美しさよりもモデルの内面的なものを描きたいと思うようになった。色と色の響き合いの美しさは人間を幸せに出来ると信じている。心がやすらぎ、幸せな気持ちになるような絵を描きたいと思う。

東京都知事賞

第二科（洋画）

長谷川 仂「港の朝・曇る日」



南イタリアの港。小さな漁船が停泊する一隅。夜仕掛け、朝掛った獲物を取りに行きます。家を離れだ若い漁夫もいて、仕事を終えると素敵な車で帰って行きます。引き継がれるものと変化する様式。風景にそつと入れたテーマの為、車の配置、構成に苦労しました。

日展会員賞

第二科（洋画）

平野 行雄「栗国島の民家」



沖縄の離島、栗国島は沖縄の原風景が残っており、アダンやパショウなどの亜熱帯の植物や赤瓦の民家、漆喰やサンゴの白砂等々、夏の陽射しを受けて一段と美しさを増し、輝いています。これらの色彩に惹かれ、画面で美しいハーモニーを奏でるよう、そして、感動が表現できればと思いつつ制作しました。

文部科学大臣賞

第三科（彫刻）

勝野 眞言「瀬」



身体の量と手足の流れに惹かれ、対象そのもののかたちを尊重しながら人体を追求した。各部を全体がどのようにに関わり合い釣り合いを取っているのか。土を使つて果てしなく探る仕事であるが、この調和を求める探索は、奥深い山間に入つて行くようで面白い。

文部科学大臣賞

第四科（工芸美術）

井俣 慶人「積日惜夏」



日毎に陽の力が弱まる秋、盛夏に繁茂した水辺の植生（ボンテデリーア）が枯れゆき、葉、茎、花茎に様々な変化が生じる。その模様や形態がおもしろく、時と共に移行行く生命を表したく思った。布の平面性と化学染料の鮮明な色彩を活かすモチーフの模様に心掛け、発想イメージが持つ多次元性をいかに平面化するか課題です。

文部科学大臣賞

第五科（書）

牛窪 梧十「岑参詩」



正方形の紙面に西周金文でこの詩を書くにあたり、造形的には大ぶりの自然石を組み上げた石垣をイメージした。文字の大小・疎密、余白などで自然さ自在さを重視しつつ、一貫した時間の流れの中でそれを定着させるといふ、止揚が課題であった。

東京都知事賞

第三科（彫刻）

齋藤 尤鶴「あおあらし」



私の住んでいる所は富山県の庄川という大きな川の側にあり、青葉をわたる爽やかな風（あおあらし）に生まれながらにひたっています。大木の中へ、その意を表現し、時間をかけて彫り出したのが、この作品です。

東京都知事賞

第四科（工芸美術）

大樋 年雄



Mesa Marley 「神光天地照」
Light of a god lights up a universe
アメリカ・アリゾナを旅した。そこはメサと言われる台地や浸食された岩山が連なり、地球とは思えない景色だった。そして先住民族との出会いからネイティブな陶芸技術を学んだ。そこで見た絶壁と断崖からの深い裂け目を土で再現する行為は、私がこれまで学んできた技術を超えさせる制作で、地塊が隆起する地球創成そのもののなかもしれない。

東京都知事賞

第五科（書）

吉川美恵子「梅」



新たな時代「令和」の典拠となった万葉集巻五「梅花の歌三十二首」より、三首を選び題材としました。様々な消息にみる卒意の趣を意識し、心地よい流れのなかに書き手の息づかいや鼓動から生まれる運筆のリズム、微妙な間を創出することができればとの思いで筆を運びました。

日展会員賞

第三科（彫刻）

中原 篤徳「ききかな「旦の終わりに」



明るさの中の暗さ、儚さの中の瑞々しさといったものを、形にしたいと思いながら制作を続けた。観念と人体の実在を行き来しながら、素直さを見失わぬよう心掛けた。自分の目指す彫刻が那邊にあるのか、ささやかな光が見えたように思っている。

日展会員賞

第四科（工芸美術）

村田 好謙「風と光と水と」



天空から降り注ぐ光と水、蜘蛛の巣に止まり宝石の様に美しく輝く。風にゆらぎはかなく美しく散りゆく花びら。何気なく出逢う自然から煌めく生命の尊さを感じ、慈しみ、心が明るく澄んでいく祈りをテーマに制作致しました。

日展会員賞

第五科（書）

田中 徹夫「ほのやみ」



迫力ある力強い線の大字かな作品と思ひ、制作に取り掛かるものの、書くほどにスケールが小さく線が固くなり伸びやかさが無くなる。九月中旬の早朝に書いた一枚が肩から力が抜け、自然体で筆が運べたように思われた。この作品が今回の出品作となりました。



普段から飼育しているクワガタ虫を観察する中で、彼らと自分に多くの共通点があり、そこに自分自身を投影することで見出せる新たな自分との出会いと、クワガタの幼虫が餌を食べた痕跡の造形に美しさ、その二つを表現したいと思って制作しています。

特に幼虫が餌を食べた時に偶然できる形と、自分の仕事の中で偶然発見できる色や形が、どこかでリンクしているような印象もあり、作品を作る時のねらいにもなっています。

（日本画）吉田松之助



元々は熊本におりましたが、画材の豊富さや美術館の多様ななど環境面での魅力を感じて四年前に上京いたしました。

慣れない土地で仕事をしつつ創作していくのは想像以上に大変でしたが、六回目の挑戦で日展に入選できたことはとても嬉しく思います。

自分の描き方を確立し自信を持って描くことができたのは、周りの方のアドバイスと夫の支えがあったからだと思っています。

皆さまのご支援に報いるべく、来年は特選に値する作品を描きます！

（日本画）河井 真里枝



石川県金沢市にある大野という港町の風景を描きました。私はこの地域から見る海の風景にとても魅力を感じていて、これまでにもそれを題材にした作品を制作してきました。今回は手前に大きく空き地を配置した構図で描いてみました。何もない空き地をどう描いていくかということには苦労しましたが、その分表現を模索したり今までには無い発見があったりと、楽しんで制作に取り組めたように思います。

（日本画）乙部 亮



若い頃からあこがれていた日展に初入選し大変うれしく思っています。

高校の美術の教員をしながら制作をし、退職後はカルチャースクールで人物画を学び直しています。六年前の個展を機に「命の輝き」を生涯のテーマと決めました。今回の入選作は老人の深い表情がテーマですが、人生の終わりを目前にした人間が見せる最後の命の輝きを描いてみました。この度の入選を励みにさらに研鑽し制作していきたいと思えます。

(洋画)宮崎 幸子



初入選の反響の凄さに驚いています。さすが日展！入選したら提灯行列するからと冗談を言ったけれど：

小品もたくさん描くよう恩師から勧められ、せと写生に出かけました。

熊本は自然がいっぱい。風に吹かれて描く楽しさは格別です。特に早朝、夕暮れの美しさは、感動の連続。夢中で月あかりで描いた事も。

これからも良い絵を描く努力を忘れずに精進します。ご指導頂いた先生、支えてくれた皆様に感謝を捧げます。

(洋画) 富田多美子



日頃より先生方から日展の長きに亘る伝統と歴史をお教へ頂き、情報溢れる昨今においては今後一層確固とした基軸が必要となつて来るのではという思ひと、斯様な存在としての栄えある日展に挑戦させて頂く事で改めて自身と制作を見つめ直したいという気持ちが膨らみ、この度初めて出品させて頂きました。

今日に至る全てに感謝申し上げ精進して参る所存です。今後共厳しく御指導の程宜しくお願い申し上げます。

(洋画) 久保尚子



(彫刻) 最上 健

この度日展に初入選することができました。これも今までご指導していただいた先生方と、支えてくれた方々のお蔭であると深く実感しております。実は、搬入直前に体を壊してしまい、周りの方々にとっても迷惑をかけてしまいました。なんとか出品することができました。自分ひとりではできないことだったと改めて思いました。今後制作を続け少しでもよい作品ができればと思います。



(彫刻) 染川 浩美

彫刻を作り続けて四十年、中学校教諭を退職し、今は美術の授業のみの非常勤講師となり、彫刻に時間をしっかりとれる第三の人生が始まりました。大作にも徐々に取り組み、至福の思いです。これから「思いっきり好きな彫刻に納得いくまで取り組んでいくぞ」と言う熱い思いでモデルに自分を投影して制作しました。憧れの日展にチャレンジしようと思える大作ができ、初出品初入選。一発花火にならないよう頑張ります。



(彫刻) 示崎 麻紀

今回初めて等身大の人体をつくりました。制作の目的は造形力を身に付けることと、現実感のある生きているような像をつくることでした。制作中はクロッキーを繰り返し行い、対象をよく見てつくるという事を常に意識して制作しました。また塑造では等身大の重量を支えられる強度を持たせつつも、石膏取りがしやすい芯棒作りを意識しました。樹脂成型も等身大は初めてでしたので今回の作品は制作中の全てが勉強でした。



(工芸美術) 南 昌伸

六十三歳にして初めての日展応募でしたが、初入選の結果を頂くことができ大変嬉しく思っております。四年ぶりの制作で自信が持てないままの応募でしたが幸運でした。会場では、著名な先生をはじめ、諸先輩方の作品群に圧倒されるばかりでしたが、皆様からのご意見やご指導を励みとし、これから一層制作に取り組んでまいりたいと思っております。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



(工芸美術) 中野 裕子

今回初めて出品し、歴史ある日展に入選させて頂きとても驚きました。学生時代に蠟燭染めを始め、スケッチから染めの工程まで気持ちを緩めず、日々楽しみながら格闘しています。まだまだ未熟で今回の作品を見ても反省点が多く目につきました。儚く美しい自然や生き物の瞬刻を染めで表現するのは難しいです。でもそこも染色の面白さだと思っています。今回の入選を励みに、今後も立ち止まる事なく、より精進して行きたいと思っています。



(工芸美術) 辻 拓真

気が付けば、私の傍らには常に日展がありました。家では父、祖父が日展へと作陶に励んでいて、町へ出れば、青木龍山先生をはじめ多くの先生方の名を目にします。そんな日展の舞台は荘厳で美しかったことを今も記憶しています。私の作品は、白磁の板造りと有田では珍しいのですが、連綿と続く日展の息吹を感じて制作しています。この舞台に作品が並んだ喜びを忘れず、精進していきたいと思っています。



(書) 金子聖子

料紙に流れる仮名の美に惹かれて書を始め、日展を訪れる度、このような作品を書ける日がくるのかと励みとしてまいりました。特に大好きな帖作品は全て拝見しながら夢を描いておりました。そしてこの度の帖での入選は、感謝の気持ちと共に、それに恥じぬよう更に励まなければという決意をうみました。校訓の「敬愛、自主、力行」を今でも座右の銘としています。今後も書を敬愛し、自主的に学び、力行していきたいと思っています。



(書) 金澤知香

この度は歴史あるあこがれの日展に初入選することが出来、喜びと重みを身にしみて感じています。漢字から仮名へ転向して十二年、仮名書の奥深さや線の難しさを日々痛感している中での入選で、恩師や仲間への感謝の気持ちで一杯です。今回の作品は長年寝かせた古い紙と対話しながら紙に合う墨色、潤渴を意識して仕上げました。これからも初入選を一つの通過点として、立ち止まる事なくより精進していきたいと思っています。



(書) 小山蘇龍

この度、改組新第六回日展において、入選しましたこと、心より光栄に思います。今回は、巻子に宋の蘇軾詩「丙子重九二首より一首」を行草で制作させていただきました。まだまだ満足のない点も多く、反省するばかりであります。この度の入選を糧に今後より一層、精進していく所存であります。最後になりましたが、この度の入選に際し、ご指導いただいた師に、また支えてくれた両親に感謝しております。



(書) 山崎珠雪

詩文書の魅力は、何といっても自分の思いを言葉に乗せて表現できることです。美しい情景や深い思いをどのような書風で書くか試行錯誤します。文学的には格調高く美しい日本語で、書風は古典の香りが感じられる表現を、というのが目指すところです。日展に挑戦し続けて早三十年。評価して頂けたことは望外の喜びです。育てて下さった会と書友達には、ただ感謝あるのみ。今後も詩文書の魅力を伝えられる作品づくりを目指します。



(書) 三森春蘭

この度は歴史と伝統ある日展に初入選させていただき、喜びと感謝の気持ちで一杯です。今回の出品作は、まだまだ未熟ながらも自分自身のありのままを表現することを念頭に、無心に制作に励みました。師より「印を刻るだけの勉強ではなく、印外に印を求める気持ちを大切にし、書・画・詩にも精進するように」と常々ご指導頂いております。今回の入選を機に更なる篆刻の世界を探究し、精進して参ります。



(書) 河田麗翔

張りつめた緊張の中、何が書けるのかと自問自答しながら書の中に沈んでいく。かけがえない私の書の時間。紙に向かい、渴筆表現、行間の響き合いに試行錯誤。そして、自分の限界を越えていくことの連続の中で書き上げた一枚。日展入選の朗報が届きました日は、夢ではないかと一睡も出来ず、朝陽が昇るのを見て、現実だと喜びが溢れました。この感動と喜びを忘れずに、書に真摯に取り組んで参ります。

日展ゆかりの

美術館 散策

第16回

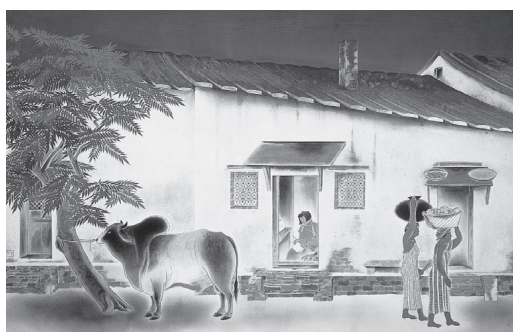
全国各地の美術館の中から日展作家ゆかりの美術館を関係者の紹介文を添えて少しずつご案内いたします。是非、日展作家の名作との出会いをお楽しみください。

山口蓬春記念館

第一科日本画 副理事長 土屋禮一

山口蓬春先生は、我が師加藤東一先生の師であり、私自身、生前お宅にも伺いお話をさせていただいた好運な思い出もある。初入選の頃、突然目の前に立たれた先生に頭をさげた。「ごなただったかなー」「日展に入選させていただいた土屋と申します。」「そうですか、お茶でも飲みますか。」「とコーヒーを御馳走になったのです。日展の先輩はなんて凄いな、日展に出品した事にただただうれしく感動したものです。絵で生きることが決まった出発の思い出にこの先生があります。

JR逗子駅からバスで二〇分。葉山の一色海岸を臨む山の中腹に山口蓬春記念館があります。大正、昭和の画壇で新しい日本画の創造、西欧的モダニズムを加え理知的な画風を



《南嶋薄暮》(昭和十五年紀元二千六百年奉祝展出品作)



《緑庭》(昭和二年第八回帝展出品作)

二三年間を過ごしたこの葉山の邸宅と先生の作品、素描、模写に、収集していた美術品等散失を防ぐべく、JR東海須田寛社長(現相談役)は蓬春を後世に伝えるべく、JR東海生涯学習財団を設立、この記念館が開館された。この建物も蓬春の学友で近代数寄屋建築の創始者吉田五十八が増改築を行い、大江匡の設計によって記念館へと改修され二人の名建築家の感性が融合し、モダンな佇まいを造り出し、若き建築家も勉強に訪れると聞く、二階の旧画室や別館二階からは天気の良い時は大島まで見渡せる。六百坪の庭園は七〇種類の四季折々の花々木々が植えられており、散策路から堪能できるようにになっている。館内では、上野動物園で飼育されている可憐な白熊の姿を描いた「望郷」の小下図を常設で展示しているほか、テーマを決めて

構成、一九六五年文化勲章を受章し晩年には、集大成とも云える皇居新宮殿に杉戸絵「楓」を完成、数々の業績を残し一九七一年五月七歳の生涯を閉じた。



山口蓬春記念館

〒240-0111

神奈川県三浦郡葉山町一色2320 TEL 046(875)6096

【アクセス】

JR逗子駅から京浜急行バス3番乗り場、京浜急行新逗子駅から南口2番乗り場より、「海岸回り葉山行(逗12)」、「海岸回り福祉文化会館行(逗11)」に乗車 バス約20分
「三ヶ丘・神奈川県立近代美術館前」下車 徒歩2分

企画展を実施、来館者はシニア層の女性が多いが、各レベルに応じた日本画教室を開催している他、小学生や中学生を対象に無料の美術に親しむ教室なども行われている。一九〇〇点の収蔵品を持つ記念館です。皆さん是非訪れていただきたいと思います。

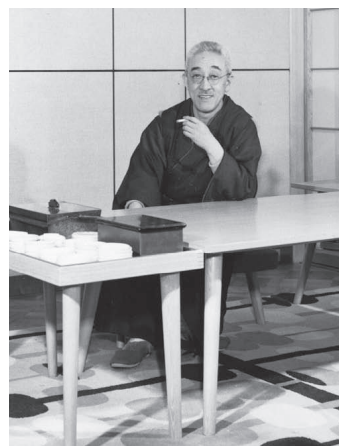
山口蓬春(1893~1971)

日本画家

日本芸術院会員

文化勲章受章 文化功労者

日展常務理事・顧問等を歴任



わくわくワークショップより

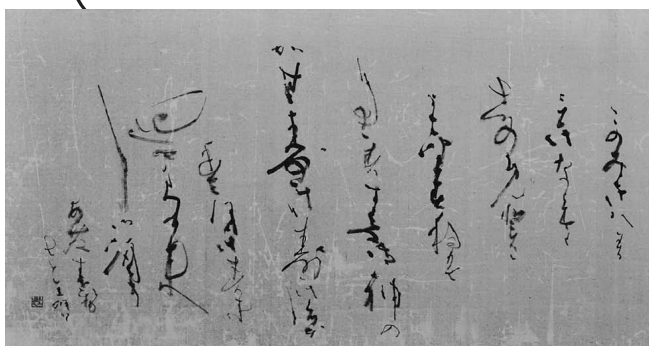
教えて、作家さん！
— 子供たちからのお便りコーナー —

赤い紙に文字がかかれていて字がくっきりと
見えてきれいでした。
なぜ作品の紙を赤色の紙にしたのかおしえて
ください。また色がうすいところありますが、
どうやってうすいところをつくったので
すか。こなみたいなのはきんぱくですか。

爽志くん 13歳

赤（オレンジ色）に見えた紙は、100年くらい前の中
国で作られた絹の布です。オレンジ色の布は濃く擦っ
た墨とよく調和して美しくすっきりと見えると思い使
いました。薄く見える部分は長い年月の間に色があせ
たものです。粉のように見えるものは金の粉で、作ら
れたときはもっとたくさんあったものが、時間がたっ
て剥がれたのだと思います。昔は色のついた美しい紙
に書かれたかな作品は、たくさんありました。

井茂圭洞



御酒

絵いっぱい梅と、はしに寺があって、京
都という感じがでてきて、なんとも言えな
いふしぎな気持ちになりました。
梅が赤色と白色にわけてあって、つぼみも
本物のようでした。

周くん 9歳

ふつうの絵のぐで描いたのではなく、じつはこの絵はうるしの木からさ
いしゅうした漆の液をもとに、その中へいろいろな色の顔料を入れてよく
練って作った「いろうるし」でかいています。いろいろむずかしい技
術でやりますが、たとえば白い梅の花は卵の白い殻をつぶしながら一つ
一つと花の形になっています。そのほかにも美しい貝のキラキラをはっ
て使ったり、金ぱくをはったり、うるしのほかにもいろいろな材料を使
います。天皇が代わられて平成から令和になりましたが、その令和の文
字の意味のもとになった話が、この絵のもとになっています。先生か
、お父さんが、お母さんに聞いてみて下さい。ていねいに見てくれてあり
がとうございました。

伊藤裕司



梅開上苑

かめの顔とこうらがとてもリアルで、はくりょくがありました。あと、魚がいるところもかわいかったです。わたしは、絵がそんな上手ではないけれど、この絵を見て色の使い方をもっと学びたいと思いました。

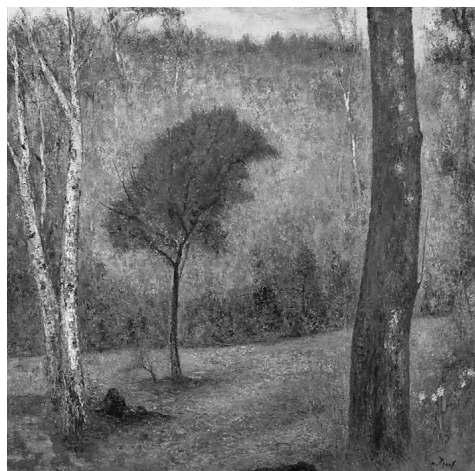
胡美ちゃん 10歳



海の哲人

この絵は夢の中で見た亀です。夢の中の色は現実の色ではなく私だけの思いの色です。絵は好きな色だけで描けるのが魅力です。亀がリアルではくりょくがあると書いてくれましたが、そのように描きたかったのです。「海の哲人」としたのも我々人間と同じく亀を魅力的にしたかったからです。君だけの色で思いやその気持ちを表現できるということです。絵は糸が会うと書きますが、いろんな色の糸が織りなし、気持ちを描くのは色だよということです。

土屋禮一



山峡の彩り

こうようがきれいでした。いろをかさねていて、ふかいいろになっていました。

敦士くん 6歳

八ヶ岳南麓に小屋を建てアトリエにして43年がたちます。日本の美しい四季を描くことを目的にしていますが温暖化と西国からの黄砂と汚染された空気による山の砂漠化を心配しています。晩秋の山麓は空気が透明で赤い色のみが残ります。風に耐え、太陽を求めて懸命に枝をのばす木に、若い人と重なり、応援して美しく生長するよう願っています。

寺坂公雄

ウサギとカメがいっしょにくらしてかわいいです。もっと作ってください。ぼくもほしくなりました。

悠貴くん 8歳

「ウサギとカメがいっしょにくらしてかわいいです。」と感想を頂きました。本当にありがとうございます。観る人に楽しんでもらえる事と、かわいいと思ってもらえるように制作しました。そこを分かってもらえて嬉しかったです。会場でお会いできて良かったです。「ほしくなりました。」と感想もありがとうございます。来年も日展を観に来て下さいね。

鈴木紹陶武



カメの動く家

●個人

東 晋一郎様 新井演子様
飯田真未様 飯塚勝己様
池田康子様 石坂幸子様
石崎國夫様 石崎喜江様
井谷善恵様 井上道守様
今田功一様 今村忠司様
岩田 薫様 岩村朝子様
梅下一弘様 大谷眞治様
岡 昌志様 奥田節子様
奥田卓三様 角井 博様
梶山純子様 金子美和様
河合 昭様 木下隆介様
栗原直子様 呉 祐輔様
児玉安司様 近藤禎男様
坂本美賀子様 佐川かおる様
佐久間基晴様 副島 隆様
高木京子様 高木千春様
高木寛史様 田頭益美様
高田久信様 高橋千笑様
高柳とよ子様 竹本大鶴様
田中宏典様 土橋正彦様
土屋礼央様 鶴巻百合子様
中田由佳様 中原有三様
中室里恵様 西田俊通様
西村潤帰様 西村友子様
野田裕一様 福田瑞子様
藤田理恵子様 堀 稲子様
真下清美様 松岡庸子様
松本正之様 宮負丁香様
宮島幸男様 村里 暁様
森寫順子様 吉村はるか様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
株式会社 一休園様
有限会社 一恕様
医療法人社団 永寿会様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 加賀屋様
株式会社 川端商会様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
ゴールデン文具 株式会社様
株式会社 光雲堂様
株式会社 佐久間太熙堂様
有限会社 三洋様
出釋迦寺様
株式会社 高山草月堂様
株式会社 筑波銀行様
T&Tパトナーズ法律事務所様
滴仙会様
株式会社 テレビ長崎様
東洋額装 株式会社様
中川特殊鋼 株式会社様
公益社団法人 日本書芸院様
有限会社 跋渉堂様
福井素鳳堂様
公益財団法人 古川知足会様
株式会社 便利堂様
有限会社 丸栄堂様
有限会社 みなせ筆本舗様
株式会社 ミライト・テクノロジー様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
株式会社 湯山春峰堂様
菱三印刷 株式会社様
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様

叙勲

令和元年二月

旭日中綬章

中山 忠彦 (日展理事)

森野 泰明 (日展顧問)

旭日双光章

一色 白泉 (日展会員)

表紙

右上 内閣総理大臣賞

斎藤秀夫「清新」

右下 文部科学大臣賞

勝野眞言「瀬」

中下 文部科学大臣賞

牛窪梧十「岑參詩」

左上 内閣総理大臣賞

山下保子「追憶」

左下 文部科学大臣賞

井隼慶人「積日惜夏」

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

西村 祐一先生(彫刻・会員) 元・10・26

佐伯 華水先生(書・会員) 2・1・20

編集後記

日展ニュースが年三回の発行になつて一年が経ちます。今号は、座談会から始まり、外部審査員の寄稿、各受賞者の作品解説、初入選者の新鮮な声等々、盛り沢山の記事でお届け致します。

思えば昨秋の度重なる台風の影響は深刻で、多くの人々の日常生活は一瞬にして寸断されて不安に包まれました。そうした中、ワンチームを掲げて、多くの試練をくぐり抜けたラガーマンの活躍には勇気を与えられました。国事行為として行われた「即位の礼」一連の行事・儀式には、この国の歴史の重さと尊さを改めて思い知らされました。

非力ではありますが作家達の祈りの如き想いは、日々の制作の中に積み重ねられて、作品として結晶します。展覧会に來られた方々の心に「生きる力」として伝わります様に願うばかりです。

(清家)

編集委員 川田 恭子 水野 收

桑原 富一 平野 行雄

清家 悟 堤 直美

相武 常雄 月岡 裕二

中村 伸夫 西村 東軒